

Ⅲ 平和への葛藤

第11章 テロをめぐる善と悪

第12章 戦うことは絶対に許されないのか？

第13章 兵役拒否と宗教

第14章 世界の諸宗教の平和運動

あとがき 星川啓慈

各章の執筆分担は、序章、第1章、第2章、第3章、第4章、第5章、第11章、第14章、あとがきを星川が、まえがき、第6章、第7章、第8章、第9章、第10章、第12章、第13章を石川が担当している。本書の特徴のひとつは、ベテランの研究者と気鋭の若手研究者との共著であることといえる。また、「あとがき」によれば、本書は「戦争研究と宗教研究という二つの領域を橋渡しするようなもの」を目指し、「大学生や一般の方々を読者に想定」して著されたものである。また、星川が公開している「比較文化専攻」ブログには本書の記述の原型もみられる。その意味では二〇一二年から、本書の構想と執筆は始まっていたと考えられる(http://www.tais.ac.jp/education/grad_school/e-8/blog/、二〇一四年八月九日閲覧)。

まず、序章では、本書の主題が的確に整理されている。「宗教が戦争の（唯一の）原因だと決して短絡的に考えないでいただきたい」と強調され、また、「宗教には戦争や武力衝突を押し進めるといふ側面がある」という議論が中心的な主題となることが提示される。

続く第1部では、戦争と宗教との関係が問題として設定さ

星川啓慈・石川明人著

『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか？』

——私たちの戦争と宗教——

並木書房 二〇一四年四月刊

四六判 一三八頁 一五〇〇円＋税

栗津賢太

本書は、次のような構成になっている。

まえがき 石川明人

序章 「戦争」とは何か

Ⅰ 戦争の現実

第1章 人は人を殺したがいらない

第2章 それでも戦争はなくならない

第3章 戦闘における生理と心理

第4章 宗教と戦争の関係

Ⅱ 戦いの中の矛盾

第5章 「人を殺すな」か「人を殺せ」か？

第6章 聖書・キリスト教における「平和」

第7章 軍事大国アメリカの宗教

第8章 日本のキリスト教と戦争責任

第9章 キリスト教史の中の暴力と迫害

第10章 戦場の聖職者たち

れ、まずは人間の本性に関する近年の研究が紹介される。デイヴ・グロスマンの『戦争における「人殺し」の心理学』やマーチン・ファン・クレフェルトの名著『戦争文化論 (The Culture of War)』に依拠して、生理学や心理学の知識が動員され、戦争に関するこれまでの研究や言説が整理される。その後、『文明の衝突』で有名な論争を巻き起こしたサミュエル・ハンティントンという「フォルト・ライン戦争」、マーク・ユルゲンスマイヤーのいう「コスモス戦争」などの諸概念が紹介・検討され、文明の核にはアイデンティティや意味の源泉としての宗教があり、宗教が絡む戦争は、それらの対決は世俗的な利害の対立を超えた、異なる世界観同士の対決という次元になりうるということが指摘されている。

第II部では、ユダヤ・キリスト教的伝統において、戦争がいかに理解され、正当化されてきたのかについて、整理される。そこでは三つの類型が提示される。①いかなる暴力をも否定する「絶対平和主義」の立場、②正義や平和を守るために必要最小限のやむを得ない武力行使のみ容認する「正戦論」の立場、③神の名において積極的に戦いをしようとする聖戦の立場、である。実際には①③の立場とも少数派であり、歴史的に、そして現在においても、もっとも広く受け入れられているのは②の「正戦論」の立場であることが指摘される。また、現在、事実上の軍事的超大国であるアメリカにおける宗教的な状況、日本におけるクリスチャンの戦争責任とその謝罪、十字軍や異端審問・魔女狩りの歴史を主題としたキリスト教における暴力の問題、執筆者の一人である石川の研究領域である従軍チャブレン

第三部では、より現代的な問題が検討されている。まず、テロリズムの問題が取り上げられ、「対立する陣営に正邪を判定することが出来るのか」という問題が考察される。いかなる戦争も自陣営にとっては「正義」であり、そのための教育システムや広告・宣伝システムが存在する状況において、何が正義であるのかは客観的には決めることはできず、正邪は常に相対的であるゆえに安易な戦争肯定論の危うさが指摘される。また各国における良心的兵役拒否 (conscientious objector) と宗教との関係についての歴史と概略、さらに現代ドイツの事例によって、この問題が詳しく紹介され、議論に客観的な材料を提供している。最終章では、平和へ向けての民衆的な努力が紹介され、ユネスコ憲章が紹介される。そして「今後、世界の諸宗教には、こうしたユネスコ憲章で述べられていることを踏まえながらも、複雑化した現代社会において、世界平和実現のための新機軸を打ち出すことが期待されます」という文章で終わる。本書の最後であるから、読者としては最終的な結論のようなものを期待してしまうが、それは得られない。もっとも、本書まえがきには、「人間自身による根本的な解決は期待できない問いであり、背負い続けるしかないもの」であって、「無理に答ええらしきものを示して取り繕うよりは、むしろ、人間は所詮はそういう動物なのだということを、ただ素直に見つめ、噛みしめることが大切である」ことが断られてもいる。こうした一種の諦観的な態度は、本書の他の箇所にもみられる。たとえば日本におけるクリスチャンの戦争責任を扱った第8章では、「し

の問題等が考察される。

第三部では、より現代的な問題が検討されている。まず、テロリズムの問題が取り上げられ、「対立する陣営に正邪を判定することが出来るのか」という問題が考察される。いかなる戦争も自陣営にとっては「正義」であり、そのための教育システムや広告・宣伝システムが存在する状況において、何が正義であるのかは客観的には決めることはできず、正邪は常に相対的であるゆえに安易な戦争肯定論の危うさが指摘される。また各国における良心的兵役拒否 (conscientious objector) と宗教との関係についての歴史と概略、さらに現代ドイツの事例によって、この問題が詳しく紹介され、議論に客観的な材料を提供している。最終章では、平和へ向けての民衆的な努力が紹介され、ユネスコ憲章が紹介される。そして「今後、世界の諸宗教には、こうしたユネスコ憲章で述べられていることを踏まえながらも、複雑化した現代社会において、世界平和実現のための新機軸を打ち出すことが期待されます」という文章で終わる。本書の最後であるから、読者としては最終的な結論のようなものを期待してしまうが、それは得られない。もっとも、本書まえがきには、「人間自身による根本的な解決は期待できない問いであり、背負い続けるしかないもの」であって、「無理に答ええらしきものを示して取り繕うよりは、むしろ、人間は所詮はそういう動物なのだということを、ただ素直に見つめ、噛みしめることが大切である」ことが断られてもいる。こうした一種の諦観的な態度は、本書の他の箇所にもみられる。たとえば日本におけるクリスチャンの戦争責任を扱った第8章では、「し

かし、宗教といえども、あるいは牧師や信者といえども、所詮は、この世の現実的な社会的文脈の中で生きるしかないものである」(一三八頁) 等々。評者(栗津)も戦争と宗教に関係する研究領域を扱っているのに、圧倒的な人類の蛮行を目の当たりにすると、こうした諦観的な心情に陥ることはよく理解できるが、これは本書の読者によって賛否が別れるところであろう。学生へ向けた教科書として考えるならば、本書は非常によく書かれている。平易な文体による的確な問題設定がなされている好著である。同時に、宗教の定義の問題にも触れられており、宗教学の入門書として現代の読者に幅広く、しかも興味深く受け入れられるであろう。つまり本書は、単なる個別研究の枠を超えて、戦争をテーマにすることにより、人間的な、と表現しようような総合的な学としての宗教学の業績として成功している。これは容易なことではないし、特筆すべきことであろう。おそらく、ベテランの研究者と若手研究者との共著であることが本書を成功させているのではないだろうか。本書のこうした手法は今後、他の問題や研究領域においても構想することが出来るだろう。

触れられていない。人道的介入の問題やジェノサイドの持つ現代的な問題、新たな野蛮の問題、近年研究の進んでいる慰霊や和解の問題にも触れられていない。

本書には、雑学のあるいはトリビア的な知識が随所にちりばめられている。これは一般読者向けとしての工夫でもあるだろうが、時に煩わしく感じることもあるであろう。また、学生向けであるなら、巻末にはリーディング・リストが欲しいところであった(もしも改訂版が出るなら是非とも加えて欲しい)。

本書が扱っている事例や歴史は、やはり西洋キリスト教に傾いているくらいが否めない。もちろん、二人の著者の専門からすれば、そのことはあらかじめ予想することができ、また学問的な誠実さからいってもそうあるべきことであろう。しかし、本書のような人類史的なレビューで、いわば戦争の宗教史とでもいえる問題を扱うからには、他の宗教伝統における戦争と宗教の歴史についても提示されるべきである。もっともこれは他の研究者に課せられた問題であるだろう。

しかし、本書の貢献は別のところにある。宗教学の知見から、戦争という現実的かつ現代的な問題を解明しようとしている点で、本書は応用宗教学的な実践でもあると考えられる。そもそも、社会学や人類学などに比べ、宗教学的な応用というものはいかに構想することが出来るのであろうか。もちろん、日本ではとりわけ東日本大震災以降、宗教学の研究者が多く現地へ赴き、さまざまな活動を行っている。社会貢献に焦点を合わせた研究者も多く出ている。宗教的なバックグラウンドを持つ宗教学者も多い。それらの活動の価値や道義的・社会的重要性

を否定する者はいないだろう。しかし、その多くは、個人や、宗教者としての実践である。それはあくまでも宗教的な実践であって、宗教学的な実践ではない。

学問的な寄与は、第一義的には認識世界に新たな知見をもたらすこととその明晰さであろう。宗教と戦争という重要なテーマを扱うことによって、本書は現代のわれわれ自身が置かれた状況について一定の理解を提示することに明らかに成功している。とりわけ第5章で指摘されている平和主義か道義的現実主義かという二者択一は、二〇一二年の尖閣諸島国有化以降、閣議決定による集団的自衛権の容認が現内閣によって断行された現在(二〇一四年)の状況において、まさにわれわれに迫られている問題である。このことは、「人を殺すこと」に対して、宗教は、そしてわれわれはどのような立場をとることが出来るのかという問題であることを明らかにしている。

いずれにしても、戦争、ひいては暴力そのものは宗教学が真剣に取り組まなければならない研究領域であることは明らかである。そしてその解明は現代的な意義を持つているし、求められてもいる。本書の成功はそのことを説得的に物語っている。